



	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
7月	737	459	545	16	7	1,764	1,718	52	197	123	107	566	4,527
累計	2,659	1,838	1,768	36	33	6,334	6,104	210	816	481	471	2,244	16,660

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

## 🔍 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

I/X3 中山法華経寺が、地域へ与えた影響が記された資料はあるか。

『中山法華経寺誌』（中山法華経寺誌編纂委員会／編 同朋舎 1981）は中山法華経寺の七百年の歴史についてまとめられており、地域社会との関わりについての記述がある。p.86には「寺院の運営を檀家制度に頼ることができなかつた中山法華経寺は、近在農村および江戸町人の間に広く信者を集め、庶民の参詣をはかることによって寺を盛りたてていこうとした。」とあり。また、VI 5「ムラの信仰と中山法華経寺」には「村々では古くから『題目講』が催され、中山法華経寺からいただいて来た曼荼羅本尊や鬼子母神の神像を掲げて、集まった講員たちが法華経の経文を読み、『南無妙法蓮華経』とお題目を唱えるならわしがあった。」(p.465)、「中山法華経寺のお会式へ参加することが、周辺の村で行われる月並の題目講においてもっとも重要なことであり、いちばん楽しみなことでもあった。」(p.466)と地域の信仰の様子について記述されている。

『市川市史 歴史編4 変貌する市川市域』（市川市史歴史編IV編集委員会／編 市川市 2020）p.79-80に、明治から大正時代にかけて法華経寺が観光地であったとの記述があり、また p.193に、1894年（明治27年）頃には、法華経寺は小学生の遠足地であったと記載されている。

『市川市景観基本計画』（市川市都市計画課／編 2004）の p.97には、「寺社周辺と参道ゾーン」の基本要素として、①寺社・参道・寺町などの風情（法華経寺参道、大門通り）②寺社林と周辺の緑（法華経寺など）③落ち着いた住宅地④伝統行事と賑わいを掲げており、法華経寺が街づくりにも影響していることが分かる。

『図説市川の歴史』（市立市川考古・歴史博物館／編 市川市教育委員会 2015）p.145には、「絵画や書籍、石造物など豊富な文化財が法華経寺とその周辺には集中しているが、なかでも昭和六十年（一九八五）、重要文化財に指定された現祖師堂が注目される。」とあり、文化財としての価値に言及している。

その他に、『なかやま』（法華経寺／発行 昭和63年内第8号より所蔵）にて、近年の法華経寺と地域の関わり、行事などを知ることができる。

492 大人になってからの左利きから右利きへの箸の矯正方法、および、その失敗談、苦労した点についての資料を探している。

「箸」「箸操作」「左利き」「矯正」等をキーワードとして蔵書検索、調査を行うが、該当資料が確認できず。国会図書館に調査を依頼した結果、以下の資料に関連する記述があることが分かった。資料1『手を診る力をきたえる』（鎌倉矩子, 中田眞由美／編著 三輪書店 2013）、資料2「非利き手での箸操作の獲得に関する文献レビュー」（丁子雄希, 角畑智彬, 吉原有佐, 渡邊雅行, 小林隆司／著 『日本臨床作業療法研究』（ISSN: 2188-8418）6巻1号 2019 p.7-11）、資料3「症例報告 類似AV型の箸操作パターンの訓練について Single subject design ABAB法を用いて」（丁子雄希, 西谷厚, 川北整／著 『作業療法ジャーナル 51号5月』2017 p.435-439）。上記資料1、3は国立国会図書館所蔵、資料2は日本臨床作業療法学会ホームページ

(<http://jscot.kenkyuukai.jp/special/?id=9258>)にて全文閲覧可能。

## 913.6 近松門左衛門の「虚実皮膜の論」とはどのようなものか。

『日本国語大辞典 第四巻』(小学館 2001)p.541「虚実皮膜(きよじつひにく、きよじつひまく)」の項に「(浄瑠璃作者近松門左衛門の芸術論で) 芸術は虚構と事実の微妙な間にあるとするもの。穂積以貫の「難波土産-発端」に「近松答曰〈略〉芸といふものは実と虚との皮膜の間にあるもの也〈略〉舞台へ出て芸をせば慰になるべきや。皮膜の間といふが此也。虚にして虚にあらざ実にして実にあらずこの間に慰が有たもの也」と紹介され、日本文芸史における虚構論の先駆とされるとの記述あり。

『近松に親しむ』(松平進/著 和泉書院 2001)p.153-156「虚実皮膜論」の項には、「近松自身、系統だてた理論を書き残してはいない。ただ、断片的ではあるが、人に語ったものが、その人により書き留められている。」と記述があり、近松の没後に出版された浄瑠璃注釈書『難波土産』の発端部分がそれであり、近松から直接聞いた自己の演劇観が書き記されているとある。

また、『近松門左衛門』(武井協三/編 ペリカン社 1991)p.31「難波みやげ」の項には発端部分が掲載されており、「この近松の文学論、演劇論は近世の芸術論として高い評価をうけ「虚実皮膜論」と通称されている。虚と実の微妙な境目のところにこそ芸の慰みというものがあるのだという、この論は、世阿弥が著した能楽の『花』の論と並ぶ、日本の代表的な演劇芸術論だといえるだろう。」との解説がある。

他に、『近松門左衛門 虚実の慰み』(鳥越文蔵/著 新典社 1991)p.237には、「虚実という考え方が芸能の世界で問題になるのは、近松に始まったことではない。(略)だから芸能における虚実論は近松によって結実したとあってよいものであろう。まさに近松の時代(元禄期から享保期の初め)の代表的な芸能論なのである。」との記述があった。

なお、『日本古典文学全集 36 芸術論集』(筑摩書房 1962)には、「難波土産発端」が現代語訳で掲載されており、『近松世話浄瑠璃集』(博文館 1928)には「難波土産」の全文が収録されている。

## Eキ 小学校6年生を対象とした日光修学旅行のためのクラス読み聞かせや朗読による絵本を探している。

日光を舞台とする絵本は所蔵が確認できなかったが、栃木県を舞台にした絵本として『きんいろのきつね』(おおかわえっせい/ぶん あかばすえきち/え ポプラ社 1977)を紹介。また絵本ではないが『日本の民話』18(民話の研究会/編 世界文化社)のp.46-59に掲載されている「てんぐさんの人だすけ」(水谷章三/文 吉崎正巳/絵)という民話に日光の地名があり、挿し絵も大きく読み聞かせに使用できる本として紹介。

朗読で使用できる本としては『栃木県の民話』(日本児童文学者協会/編 偕成社 1980)、『子ども日本風土記』9 栃木(日本作文の会/編集 岩崎書店 1980)以上2点を紹介した。

## 他にもこんな質問ありました (クイック・レファレンスから)

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など
----	----	----------------

I/C1	市川市内の小学校名はほとんどが地名からとられているが、信篤という地名はないのに、信篤小学校・信篤公民館となっている。この名前に由来はあるのか。⇒『校歌は生きている』(市川市教育委員会 1987)p.139より、元は高谷尋常小学校だったが、昭和29年に当時校長だった大畑 <sup>ツトム</sup> 窓が『論語』の中の「言忠信行。篤敬」から命名したことがわかる。	
------	---	--

489.5 ニホンオオカミに関して日本各地に伝わる民俗・説話・神話・由緒について記されている資料⇒『日本人とオオカミ 世界でも特異なその関係と歴史』(栗栖健/著 雄山閣 2004)、『オオカミの護符』(小倉美恵子/著 新潮社 2011)、『幻のニホンオオカミ』(柳内賢治/著 さきたま出版会 1993)、『ニホンオオカミの最後 狼酒・狼狩り・狼祭りの発見』(遠藤公男/著 山と溪谷社 2018)、『秩父・奥武蔵 山と伝説の旅』(神山弘/著 金曜堂出版部 岳書房(発売) 1985) p.137、p.177、『オオカミは大神 弐 狼像をめぐる旅』(青柳健二/著 天夢人 山と溪谷社(発売) 2021)等を紹介。